

井島
上津
宗忠
雄夫
編

玄玉和歌抄

古典文庫

古典文庫第二四八冊

昭和四十三年三月十五日印刷発行

非売品

雲玉和歌抄

編者

井島 津忠夫
上 宗雄

発行者 吉田 幸一

東京都板橋区熊野町三四

印刷者 帝都印刷製本株式会社

発行所

東京都（王子局区内）
北区西ヶ原三ノ三四ノ二二

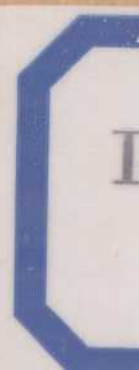
古典文庫

電話（九一〇）二七一七
振替口座東京一四五九七番

井島
上津
宗忠
雄夫
編

玄玉和歌抄

古典文庫



I313. 23
J42



古典文庫第二四八冊

昭和四十三年三月十五日印刷発行

非売品

雲玉和歌抄

編者

井島 上津 宗忠 雄夫

発行者 吉田 幸一

東京都板橋区熊野町三四

印刷者 帝都印刷製本株式会社

発行所

東京都（王子局区内）
北区西ヶ原三ノ三四ノ二二

古典文庫

電話（九一〇）二七一七
振替口座東京一四五九七番

(雲 玉 抄 跋

源 貞 範 八)

平のなにかしと申たてまつりて弓馬の家にすくれ威を八州にふるひ諸
道に達して政を南総にをさめ中にも大和哥に心をよせて作(佐内・八・神)
倉と申地にさきくさのたねをまき給誠に 桓武の御すゑ平安のみやこ
をあらためたまひてこのところ天長く地久しとみえたりこゝにほうけ
つきたる世捨ものあり若年のころ(より内)武州江城辺に星霜を送りしか
秋風たちて露のみたれにむさしのをまよひ出老年に及ひ貴命懇志のあ
まりに三四年の春秋を彼地になくさみ節の一つき月のうた合のよすか
にな(はか神)り(や神)愚哥しるしたてまつるへきおほせしきりなり隅田
川のむかし宮こ鳥に(こととひ神・八)なれしかとも涙の真砂のあとゝむる
こともなく浪のもくつかきすて侍れは心の泉みなもとあさく硯のうみ

ひかたとなりぬ近曾万葉由阿みとて詞林採要をかき六花をあつめて定
家為家のあとをけかせしかともその詠哥とて一首もみえす書あつめた
るものみな本文也多才と見えぬれともわかものなし八宗諸経を論する
も仏にならんかためなり三代八本を学するは（も神・八）うたよまんかた
めなり柿本の記にも和国に生れて哥よまさらんはつはさなき鳥のこと
くひれなき魚に似たりよしあしも心のたねにはもれされは神慮仏陀の
感応一すちなり上天下の公物とてたてられたるは和歌筆道有織（職内・
八）このみつの外なし是をふ（な八）さね（れ八）て家になりたる人貫之又定
家等也御堂関白殿御子左流とて歌筆の両道にすくれ古今の説をもたて
たまふ基俊その道をつき俊成卿に秘説をさつけしそのころは六条家経
信俊頼上手にて一道をたてしかは相伝三にわかれ（た八）り後鳥羽院こ

これらの古今をめして叡覽あるにいつれも貫之の自筆なりしか歌区々也
和歌所にを^いゐて諸人不審にまどふ中にも人丸の紅葉はなかるといふ哥
の下ニの句嵐ふくらし時雨ふるらし両義異説みつにかはれり（定家卿申さく
貫之も上古風分別にまどひしにや今ふた（一神）たひ神・八此世に生れて古今撰しあ
らためはやの執心伝へきく所詮三を見分て一本になすへしとてあらし
をも時雨とはかり定られしを家隆卿嵐こそ詞かろくて古風なれと申さ
れしを定家はかの卿の歌くちとへ本・二ゆとゝ（ゆゑ八、ひと神、ゆとへ内・松）なれは見及
ひかたし時雨にてはニ（も八）あらしもこもるものとありしに此等のか
はりめ両神ならてはわきまへたまはしあやまりの家三代をすきしとあ
らそはれしか家隆の子孫（ナシ神・八）隆祐にて跡たえぬ定家の御流のみ
末の世の亀鑑となれり住吉玉津嶋の神慮もみえて貫之の再誕と世には

申なり

抑漢土には礼学たつて三十万年伏羲（義内・八）文王周公孔子四聖人をあ
け本朝には万葉以来人丸貫之俊頼定家はまれをとる此道のさかりは延
喜堀川後鳥羽の御時を峠としてそれよりくたり坂也いかてか秀哥いて
こん流石にみちて（に内・神・八）ふける輩たえすといへとも一首もぬしな
らすもしは古人の秘歌聞をきし奥儀有情非情寄異変化の歌等人の耳目
にもれたるのみ記交せしめは桜をみて雲に心をかけ玉をしたひてあま
にちきりをこめ金は色を真砂にまかへもくつにひろふ玉さかにもその
あとをあらはすかことく僻案のことゝもかきてたてまつるをや

雲玉和歌集抄上（ナシ神）

春 部

初春寄道祝和歌

納叟

1 ことの葉に国もなひきてあつさ弓八百万代や春のはつ風

冷泉家には試筆の哥とて此題をとし／＼墨摺あらし（へす神）よめれはなに
のよろしきかあらん二条家には梅久為春友と云ことをよめる也

四方拝の心をつかふまつりし

2 日のいつるかたより先やたなこゝろあはせてむかふそめ色の山

△……部分朱▽

屠蘇白散の心をよみ申せし

3 をしなへてたれ（たれミセケチ、右傍に「わか」内）えつゝみんなしろくちる春さ
へ雪のむらきえ（さき神）の庭

むらさきの雪くれなるの雪（紅葉松）皆仙薬也

もとの人の哥にもこの題にて

4 春ことにけふなめそむるくすりこはわれ（れミセケチ、右傍に「か」内）えつ
つみんな君かためかと

正月元日天子此薬をきこしめすにこ（二子松・神）わらはまつなめてたてま
つる一人これをのめは一家病なし一家のめは一里病なしあるうたに

5 すへらきの星をとなふる雲のうへに光のとけき春はきにけり

此哥も四方拝の心なり天子干（寅神）時四方拝ませたまふ本命（名神）元辰当
年属（ナシ神）星と七反唱へたまふ也小朝拝節会等は年中行事に注せり題林
共にあれは略之

青女司霞即事

6 けふの春なをふる雪やしらあやのあやしきまてにさほ姫の空おほれ
して山のはに霞の衣たちやかふらん

短歌にあらず旋頭にあらず此躰万葉におほしこれらの哥注申へきにあらね
とも稽古の道はかやうの事難題経文文集蒙求朗詠の小題等如形も口にふる
ゝをもつて師弟の契約の印なり青女司霞（葉松・神）夏葉守の神となり赤女
司露秋滝田姫となり玄（ナシ松・神）青（ナシ内）女司霜冬しらひめと也三玉
女とこれをいふ

一日百首申せし 立春遠情

7 もろこしもけさやかすめる鳥がなくあつまよりたつ春の明ほの

けさはあけほの同事と申方あるへしこれは所をわけてよめはくるしからず
万葉にはけさのあさけ（明ほの内）とあまたよめり

相州にて浦の早春を

8 かそふれはうき身に年はこゆるきのいそちにかゝる老の浪かな

招月庵と申て近年ならひなき上手の哥に社頭の霞を

9 八幡山三津の衣の玉手はこふたつはたちぬ雲よかすみよ

彼門弟に褒美せしと也是作哥也又立春の哥に

10 あめつちのひらけしよりの春霞けふたつまでにくへなるらん

此哥こそ心より出来てたけもあれは巻頭の哥にも尤なれと木戸孝範はあり
しなり 為尹朝臣は冷泉家にはすくれたまひし立春雲を

11 よこ雲のわかるゝきはもみえわかてかすめる山の初春の空

先年於御前七百番御歌合に浦朝霞を申せし

納叟

12 横雲のたちわかるれはやかてまたなひくかすみの袖のうら風

関路の霞を千首のうち

為尹

13 鳥の音に（そ神）かすみのこれる相坂のせきのとやまの春の明ほの

西行か秋きりに立もらさるゝさをしかのおもかけにて候

山家のかすみを

定家卿

14 霜かれの草の戸さしの悲しさもかすみにかゝる春の山のは

能宣が戸さしよりいてゝ霞にのこるの字肝心と存るをや

新古今春部に

家持

万葉より
撰いたせり

15 卷向の松原もいまたくもらぬ（ね松・内・神）は小松かはらにあは雪そふる

此哥故一比連歌に淡雪を春の季に用ゐられしと也宗祇公二条大閣にとひた

△マ、△

てまつられし時春の季なしくもるといふは霞のこと（す内）かとはかり聞書
にありしより淡雪春にあらず此哥集には題しらすとあれば（と神）余寒の題

也・楨の・松原も寒にせめられぬれはさひ色になりて陽氣の入ぬれはみとりの
色を發する時陰くらくなりてくもる也余寒いまたつよくて深山の松原もく
もらねは小松か原もたゝ雪の降と景氣をよめる哥也かやうの哥は前一条殿
われらはしらすとこそ木戸孝範にはの給ひしをや
堀川百首の内うくひすを

顯季

16

金葉 鶯のなくにつけてやまかねふくきひの山人・(中山松・神)春をしるら
ん

此哥もきこえたるやうにてふしありこの山はいつも暖氣にて冬春の差別な
し鶯の鳴にはかり春をしるとなり

古今に鶯

言直

17

春やとき花やをそきときゝわかんうくひすた・(ね神)にもなかすも・(ナ
シ神)有哉

このはなを梅の事と云人あり曲なし惣別はなはをそかるへき年はうくひす
の初音むすほふれてくせる也うちひらきてこゑのきこゆるははなもはやし
ときゝわかんにいまたなかぬは余寒つよきところそよめれ
山寒花未開と云ことを申せし

納叟

18
いたむとてころさへをそくさくら木のはなまでさらはさえよ山風

これはいりほかのやうにきこゆ

正月七日御懷紙の時又当座題(曉神)残雪

19
ふりつみし雪のむら山そのまゝに春は千さとの月の明ほの

曉入梁王苑雪滿群山夜登庾公樓月明千里此上下の句にて申はかりなり

定家卿自讃の哥の卷頭に

20
春のよの夢のうき橋とたえして峯にわかるゝ横雲のそら

此哥を竹園抄と哉らんに病哥とて理のなきやうにしるせり為定家のまねして